

ロシア語における性に関する意味的一致の選択と社会的要因

光井明日香

《要旨》

ロシア語には男性も女性も指示する職業や社会的立場を表す男性名詞があり、これらの男性名詞は女性を指示する際に性に関する一致についてバリエーションを持つ。光井 (2015, 2018) ではこれらの名詞を混合名詞と呼び、記述的、理論的に考察を行った。本稿では、混合名詞のふるまいについての筆者による一連の研究の中でこれまで課題となっていた意味的一致の選択に社会的要因、特に年齢と性別が与える影響について先行研究と筆者の行ったアンケート調査のデータをまとめ、今後の議論、考察へとつながる資料を提示した。先行研究のデータはこれまで統計的な処理がなされていなかったが、今回年齢と性別についての検定を行ったところ、年齢については、年齢と意味的一致を選択する比率は統計的に有意な差が見られるものの、相関関係は小さかった。また性別については述語動詞については有意な差が見受けられた。一方筆者が行ったアンケート調査のデータでは、年齢については *одна* と *врач, судья* との意味的一致について有意差が見られたものの、性別についてはすべての項目において統計的に有意な差は見られなかった。

《キーワード》

ロシア語、意味的一致、社会的要因、有意差検定

1. はじめに

現代ロシア語には、*врач*「医師」や *директор*「長」といった男性も女性も指示する職業や社会的な立場を表す男性名詞があり、これらの男性名詞は女性を指示する際に性に関する一致¹ についてバリエーションを持つ。例えば、(1) で示すように女性を指示する際に述語が男性形で一致する統語的一致² だけではなく、女性形で一致する意味的一致も行う。

¹ АН СССР (1980)では定語と名詞の一致を *согласование*、主語と述語の一致を *координация* として区別しているが、本稿では区別せずすべて「一致」と表す。

² 「syntactic agreement「統語的一致」は「грамматическое согласование (grammatical agreement)「文法的一致」(Розенталь: 1974, Comrie et al.: 1996)」、「formal agreement「形式的的一致」(Corbett: 2006)」とも言われることもあるが、これらはすべて等しく「意味的一致」との対立項である。

光井明日香：東京外国語大学非常勤講師



- (1) Врач пришел. / пришла. (Corbett 1983: 31) ³
doctor-m.nom. come-ra.m. come-ra.f.
「医師が来た」

女性を指示する際に一致にバリエーションを持つ врач などの第 1 変化⁴ の男性名詞を指して Corbett (1991: 38-39, 183-184) は hybrids といい、いわゆる総性名詞⁵ とは区別している。また、光井 (2015) は先行研究で指摘されている第 1 変化の男性名詞に加え、судья「裁判官」などの第 2 変化の男性名詞、конференсье「司会者」などの不変化の男性名詞も同じようなふるまいを見せることを示し、これらを「混合名詞」と呼んだ。混合名詞について、光井 (2015) ではそのふるまいについて先行研究と筆者の行ったアンケート調査より記述の全体像を概観することを目指し、混合名詞はひとつのきれいなカテゴリーではなく、総性名詞と合わせて男性名詞的なものから女性名詞的なものへのある種のグラデーションを描いていることを提示した。また、光井 (2018) では混合名詞のふるまいには女性を指示する際に一致にバリエーションが見られるという共通点があるが、同時に、主格とそれ以外の格における一致定語との一致、два (две) 「2」、оба (обе) 「両方」との結合において相違点が見られることを示した。そして Pesetsky (2013) の女性化形態素 Ж を利用して、ある一定の一致素性がコントローラーの名詞に揃うと Ж が非活性化され、意味的一致が阻害されることを示した。しかし、光井 (2015) と光井 (2018) は狭い意味での文法内での性に関する一致のバリエーションについて記述的、理論的に考察を行ったもので、意味的一致の選択に年齢、性別などの社会的要因が与える影響については今後の課題として残されていた。

本稿では、混合名詞のふるまいについての一連の研究の中でこれまで課題となっていた、意味的一致の選択に社会的要因、特に年齢と性別が与える影響について先行研究と筆者の行ったアンケート調査のデータをまとめ、今後の議論、考察へとつながる資料を提示することを目指す。社会的要因には年齢、性別以外にも居住地や教育など様々なものが考えられるが、筆者の行ったアンケート調査において一定数のデータが示せるものが年齢と性別であるため、本稿ではこのふたつの要素について扱っていく。

混合名詞のうち第 1 変化の男性名詞についての先行研究では、小規模、大規模のアンケー

³ 例文は特に出典を明記しない限り、筆者が作成しロシア語母語話者に確認をとったものである。以下グロス議論に関わるものだけを示す。本稿で用いた文法情報の略記は以下の通り：

m.=masculine「男性」、f.=feminine「女性」、n.=neuter「中性」、nom.=nominative「主格」、gen.=genitive「生格」、dat.=dative「与格」、acc.=accusative「対格」、ins.=instrumental「造格」、pre.=prepositional「前置格」、genq.=genitive of quantification「数量生格」、sg.=singular「単数」、pl.=plural「複数」、pr.=present「現在、非過去」、pa.=past「過去」

⁴ 名詞の変化区分については АН СССР (1980: I 484-493) に従った。

⁵ 総性 (общий род) 名詞は сирота「孤児」や коллега「同僚」といった男性を指示する際は男性名詞としての、女性を指示する際には女性名詞としてのふるまいをする名詞を指す。

ト調査から意味的一致の選択に関していくつかの社会的な要因が指摘されてきた。多くの先行研究で引用、考察されているのが M. В. Панов が中心となって行われた大規模調査である。また、規模は小さいものの Corbett (1983) は Wood (1980, Corbett (1983: 37-38) より引用)⁶ の行った調査を引用し考察を加えている。しかし、どの先行研究もデータは示されているものの統計的に有意な差があるのかということは示されておらず、また大規模な社会言語学的調査は 1960 年代、Wood の調査も 1980 年発表と、行われてから時間が経過しており必ずしも現在のロシア語の状況を反映しているとは言えない。本稿では、先行研究をまとめるとともに有意差検定を行った。また、筆者の行ったアンケート調査は 2011 年以降のものであり、データの数は大きくないもののロシア語の現状を多少なりとも反映しており、データを示すことに一定の意義はあると考えられる。以下、2. で先行研究の概観と先行研究のデータの有意差について検定を行い、3. で筆者の行ったアンケート調査の概観とデータの有意差について検定を行う。4. ではまとめと今後の課題を示す。

2. 先行研究と有意差検定

2.1. 先行研究の概要

性に関する意味的一致についての調査データを示した主な先行研究として挙げられるのは、1960 年代に M. В. Панов が中心となって行われた大規模な社会言語学的調査のデータとその考察である。Крысин (1974: 3) によると、まず 1959 年に発音についての、その後 1963 年に形態論と語形成についての、1964 年には語彙についての質問集が作られ、1963 年から 1966 年の間にロシア語母語話者に配布、データの収集が行われた。回答者数は調査によってばらつきがあるが、3000 人から 4000 人ほどである。調査の詳しい結果については Панов (1968) と Мучник (1971)、Крысин (1974) に掲載されている。また、この調査のデータを用いて、Китайгородская (1976)、Corbett (1979, 1983)、Comrie et al. (1996) でも性に関する意味的一致を引き起こす社会的な要因についての考察が行われている。

Крысин (1974: 20) は大規模調査にあたって、選択に影響を与えうる話者の社会的要因として、年齢、教育と教育を受けた場所、社会的立場、幼児期を過ごした場所、最も長く居住した場所、話者がラジオやテレビを視聴する周期性、両親の社会的立場と彼らの出生地などを挙げている。性に関する意味的一致については、このうち年齢、教育、社会的立場、

⁶ Wood (1980) は未刊行論文のため、Corbett (1983: 37-38) を二次資料として引用する。Comrie et al. (1996: 244-248) も同様に Corbett (1983: 37-38) を二次資料として Wood (1980) を引用しており、初出では Wood (1980, quoted in Corbett 1983: 37-8) とし、それ以降は Wood は著者名のみ記して発表年は書いていない。本稿も Comrie et al. (1996: 244-248) に従い、初出では発表年と Corbett (1983: 37-38) より引用した旨を記し、以降は著者名のみ記載することとする。なお、Corbett (1983: 254) で記述されている書誌情報は以下の通りである。

Wood, R. (1980) 'Morfologiĉeskie varianty slov', unpublished undergraduate dissertation, University of Aston

最も長く居住した場所についてのデータが存在する。さらに、Comrie et al. (1996: 247)や Corbett (1983: 38)はインフォーマントの性別の影響についても指摘しているが、この大規模調査では性別に関するデータが示されていない。そこで Corbett (1983: 38)は Wood の行った調査データを引用し、インフォーマントの性別が与える影響について考察を行っている。Corbett (1983: 37)によると、Wood はヴォロネジ大学の4、5年生とヴォロネジ州のある学校における13-16歳の生徒に対してアンケート調査を行っている。

2.2. 先行研究のデータと有意差検定

2.2.では先行研究のデータについて、インフォーマントの年齢と性別の順で示し、有意差検定を行う。1960年代に行われた大規模な社会言語学的調査の性に関する意味的一致に関する質問は以下の4種類の文についてである。それぞれ述語あるいは定語が男性形で一致する文と女性形で一致する文のどちらを用いるかを尋ねるものである。Китайгородская (1976: 146)によると、インフォーマントは以下のような「女性に対してはどのように言うか」という質問に答える必要があった。

Как бы вы сказали применительно к женщине:

врач пришел	или	врач пришла
управдом выдал справку	или	управдом выдала справку
у нас хороший бухгалтер	или	у нас хорошая бухгалтер
Иванова — хороший врач	или	Иванова — хорошая врач?

それぞれの文を見ていく。それぞれ前に男性形、後ろに女性形を示す。

(2) Врач пришел. / пришла.
 doctor-m.nom. come-pa.m. come-pa.f.
 「医師が来た」

(3) Управдом выдал / выдала справку.
 house manager-m.nom. issue-pa.m. issue-pa.f.
 「住宅管理人が証明書を交付した」

(4) У нас хороший / хорошая бухгалтер.
 good-m.nom. good-f.nom. accountant-m.nom.
 「うちにはよい会計係がいる」

- (5) Иванова — хороший / хорошая врач.
 Ivanova-f.nom. good-m.nom. good-f.nom. doctor-m.nom.
 「イワノワはよい医師だ」

(2) と (3) は動詞述語との、(4) と (5) は定語との一致についての文である。全体的なデータは Corbett (1983: 32) に示されているものがわかりやすいため⁷ 以下に引用する。

- (6) ロシア語における第 1 変化の男性名詞と定語、述語との一致 (Corbett 1983: 32)⁸

文	N	女性形での一致を選択した人 (%)
(A) Управдом выдала справку.	3806	60.7
(B) Врач пришла.	3806	51.7
(C) У нас хорошая бухгалтер.	3835	25.5
(D) Иванова — хорошая врач.	3835	16.9

年齢別の動詞述語、定語との意味的一致の選択に関するデータは Панов (1968: 30, 39) より引用する。今回は動詞述語については (2) についてのデータを、定語については (4) についてのデータを扱う。それぞれ、動詞述語との意味的一致については (7) に、定語との意味的一致については (8) に表を示す。

- (7) 年齢別の動詞述語との意味的一致の選択 (Панов 1968: 30)

年齢別グループ ⁹	回答総数	Врач пришел.を選択 (%)	Врач пришла.を選択 (%)
1909 年まで	355	49.8	42.2
1910-1919 年	188	44.1	45.2
1920-1929 年	433	38.1	51.0
1930-1939 年	1285	36.7	53.7
1940-1949 年	1652	37.3	53.1

⁷ 本稿で引用するデータは元は同じであるが、それぞれの先行研究で示し方が異なり、グラフのみしか掲載されていない場合などもあるため、表になってわかりやすいものをそれぞれ引用する。そのため、同じ調査でも表ごとに引用する文献が異なる場合がある。

⁸ Corbett (1983: 32)によると、表中の N は回答者の総数を表すが調査結果の中でも違いがみられ、同じ調査結果を使用した表においても異なりが見られる。例えば、(6)において(B) Врач пришла.の N は 3806 であるが、Панов (1968: 27)と Мучник (1971: 229)では 3789 である。この数の違いについての説明はなされていないが、Corbett (1983: 32)は「いくつかのアンケートが完全に回答されなかったことが原因ではないか」と指摘している。以下、先行研究からのデータ引用の表において N は回答者の総数を表す。

⁹ 年齢別グループは何年に生まれたかということを表す。

(8) 年齢別の定語との意味的一致の選択

(Панов 1968: 39)

年齢別グループ	回答総数	хороший бухгалтер を選択 (%)	хорошая бухгалтер を選択 (%)
1909 年まで	353	83.5	12.5
1910-1919 年	184	69.0	27.1
1920-1929 年	433	71.9	23.0
1930-1939 年	1288	68.1	26.6
1940 以降	1651	66.9	28.4

これらのデータより、Панов (1968: 30)と Corbett (1983:35)は意味的一致の使用が年齢が若くなるほど増加していることを指摘している。

次に統計的には有意差があるのかどうかについて見るため、(7) と (8) のデータに関してカイ二乗検定¹⁰を行った。また、小林 (2014: 85) など指摘されているように、サンプルサイズが大きくなると結果として得られる p 値が小さくなる傾向があり、実質的な差がないのに有意差があるという誤った解釈が導かれる危険性がある。そのため、大規模調査のデータでは効果量 (クラメールの V) も示す。

述語動詞との一致についてのデータである (7) を検定した結果、 p 値は 0.000 とごく小さい値となり、有意水準 0.1%で有意差ありという結果となった。ただし、効果量 (クラメールの V) の値は 0.0821 と 0 に近いので、統計的には有意差があるが年齢と意味的一致を選択する比率には相関がほとんどないということが言える。

次に定語の一致についてのデータである (8) を検定した結果も (7) と同様、 p 値は 0.000 とごく小さい値となり、有意水準 0.1%で有意差ありという結果となった。ただし、効果量 (クラメールの V) の値は 0.1068 となり、0.1 以上なので「効果量小」となり、動詞述語よりも相関があるが、ごく小さい相関関係であると言える。以上より、検定の結果、年齢と意味的一致を選択する比率は統計的に有意な差が見られるものの、相関関係は小さいということが見てとれる。

では、性別についてはどうだろうか。Corbett (1983: 38)は Wood の調査を引用し、女性の方が意味的一致を好む傾向があると指摘している。以下、Corbett (1983: 38)よりデータを引用する。

¹⁰ 検定には比率ではなく数値が必要なため、先行研究で示されているパーセンテージと回答総数から人数を計算した。その際、小数点以下が生じる場合には四捨五入を行っている。

(9) インフォーマントの性別が意味的一致の選択に与える影響 (%) (Corbett 1983: 38)

	男性	女性	合計
(A) Директор вошла в комнату. 「社長が部屋に入ってきた」	50.0 (N=36)	85.7 (N=28)	65.6 (N=64)
(B) Наконец врач пришла. 「ついに医師が来た」	43.2 (N=37)	82.1 (N=28)	60.0 (N=65)
(C) Она известная скульптор. 「彼女は有名な彫刻家だ」	12.8 (N=39)	14.3 (N=28)	13.4 (N=67)

(9) の (A) と (B) ではどちらも動詞述語との、(C) では定語との意味的一致が行われている。インフォーマントの性別については比率検定を行った。(A) の директор と述語動詞との一致では、 p 値は 0.0121 となり、有意水準 5% で有意差ありという結果となった。

(B) の врач と述語動詞との一致では p 値は 0.0377 となり、これも有意水準 5% で有意差ありという結果となった。しかし、(C) の скульптор と定語との一致では p 値は 0.9478 となり、有意差が認められなかった。以上より、性別については、このデータからは述語動詞との意味的一致に関してのみ統計的に有意な差が見られる、つまり Corbett (1983: 38) が指摘している通り、女性の方がより意味的一致を選択すると言えるだろう。

以上、2. では先行研究の概観とデータの有意差検定を行った。その結果、年齢差については有意な差が見られるものの相関関係は小さいということがわかった。また、インフォーマントの性別については述語動詞に関しては有意な差が見られるということがわかった。

3. アンケート調査の結果と有意差検定

3.1. アンケート調査の概要

2. で性に関する意味的一致についての先行研究のデータを見てきたが、どちらの調査も 1960 年代と 1980 年と実施されてから時間が経過しており、必ずしも現在のロシア語使用の状況を反映しているとは言えない。そこで、データの規模は大きくはないが、ロシア語の現状を示す資料として、筆者が 2011 年、2012 年、2014 年に実施したアンケート結果のデータの中から混合名詞の意味的一致に関するものを選択し、年齢別、男女別にまとめ、有意差検定を行った。性別については 2011 年、2012 年、2014 年のアンケート結果から 13 項目を、年齢については 2012 年、2014 年のアンケート結果から 14 項目を選択して¹¹ 検定

¹¹ アンケートでは混合名詞以外にいわゆる総性名詞についても質問を作成しているため、今回の考察に関連のない項目については扱っていない。また、比率検定ではデータに 0 があると測定不能となるためこれも除外している。また、2011 年のデータでは母数が少なく年齢差でわけるとそれぞれの数値が少なすぎたことから、今回は年齢差の検定は行っていない。

を行った。それぞれのアンケート概要を以下に示す。どのアンケート調査でも、質問項目について自分が用いると判断したものに○あるいは✓をつけてもらい、複数回答も可とした。

(10) 2011年のアンケート調査概要

- ・実施期間：2011年夏
- ・実施場所：東京など¹²
- ・回答総数：35名（男性12名、女性22名、無回答1名）
- ・年齢：10-20歳5名、21-30歳5名、31-40歳9名、41-50歳7名、51-60歳4名、61-70歳2名、70歳以上2名、無回答1名

(11) 2012年のアンケート調査概要

- ・実施期間：2012年9月7日-9月15日
- ・実施場所：モスクワ
- ・回答総数：106名（男性43名、女性63名）
- ・年齢：10-20歳39名、21-30歳43名、31-40歳11名、41-50歳7名、51-60歳4名、61-70歳2名

(12) 2014年のアンケート調査概要

- ・実施期間：2014年9月23日-9月29日、10月1日-10月24日
- ・実施場所：サンクトペテルブルグ、モスクワ、東京
- ・回答総数：122名（男性30名、女性90名、無回答2名）
- ・年齢：10-20歳20名、21-30歳25名、31-40歳35名、41-50歳19名、51-60歳13名、61-70歳8名、70歳以上1名、無回答1名

次に、3.2.では年齢、性別の順でデータを提示し、有意差検定を行っていく。

3.2. アンケート調査のデータと有意差検定

まず、年齢について意味的一致を選ぶ比率を示す。2012年の調査では врач, судья と два (две) 「2」、оба (обе) 「両方」、один (одна) 「1、ある～」との意味的一致について、2014年の調査では конференсье と два (две)、оба (обе)、один (одна)との意味的一致について、また хирург と定語の意味的一致について質問を作成した。以下、(13)で врач について、

¹² 筆者が東京で行ったものと、東京在住のロシア語母語話者に協力してもらい、周囲に配布をしてもらったものである。そのため、実施場所は「東京など」とした。

(14) で судья について、(15) で конференсье について、(16) で хирург についてそれぞれデータを示し、カイ二乗検定を行う。項目は意味的一致の含まれている句のみを示した。また、50 歳以上のデータが少ないこと、また Панов (1968: 30, 39) のデータでも 1909 年までと当時では 50 代の半ば以降はデータをひとくくりにして提示していることから、本稿でも 50 代以降はまとめて提示した。

(13) врач との意味的一致と年齢 (%)

質問	10-20 歳	21-30 歳	31-40 歳	41-50 歳	51 歳以上
(i) об обеих врачах	15.38 (N=39)	4.65 (N=43)	0 (N=11)	1.43 (N=7)	1.67 (N=6)
(ii) одна врач	23.8 (N=39)	13.95 (N=43)	18.18 (N=11)	42.86 (N=7)	66.67 (N=6)
(iii) у одной врача	2.56 (N=39)	0 (N=43)	0 (N=11)	0 (N=7)	16.67 (N=6)

(13) のそれぞれについてカイ二乗検定を行った。(i) と (iii) では p 値はそれぞれ 0.332 と 0.080 となり、有意差は認められなかった。ただし、(ii) に関しては p 値は 0.036 となり、有意水準 5% で有意差ありとなった。(ii) ではあくまで今回のデータだけから言えることであるが、先行研究で指摘されている状況とは逆で年齢が上がるほど意味的一致を選びやすいということが見てとれる。

(14) судья との意味的一致と年齢 (%)

質問	10-20 歳	21-30 歳	31-40 歳	41-50 歳	51 歳以上
(iv) две судьи	74.36 (N=39)	48.84 (N=43)	63.64 (N=11)	71.43 (N=7)	33.33 (N=6)
(v) обе судьи	71.79 (N=39)	55.81 (N=43)	63.64 (N=11)	100 (N=7)	66.67 (N=6)
(vi) обеих судей	58.97 (N=39)	53.49 (N=43)	63.64 (N=11)	100 (N=7)	66.67 (N=6)
(vii) одна судья	53.84 (N=39)	44.19 (N=43)	54.55 (N=11)	100 (N=7)	83.33 (N=6)
(viii) об одной судье	56.41 (N=39)	41.86 (N=43)	63.64 (N=11)	100 (N=7)	50.00 (N=6)

(14) に関しては、(iv) から (vi) では p 値はそれぞれ 0.069、0.178 と 0.176 となり、有意差は認められなかった。しかし、(vii) と (viii) では、 p 値はそれぞれ 0.043 と 0.036 となり、有意水準 5% で有意差ありで、врач と同様に одна との一致について有意差が見られることとなった。また、特に (vii) については врач と同様に年齢が上がるほど意味的一致を選びやすいということが見てとれる。

(15) конференсье との意味的一致と年齢 (%) ¹³

質問	10-20 歳	21-30 歳	31-40 歳	41-50 歳	51 歳以上
(a) две конференсье	15.00 (N=20)	24.00 (N=25)	14.29 (N=35)	10.53 (N=19)	22.73 (N=22)
(b) обе конференсье	25.00 (N=20)	32.00 (N=25)	20.00 (N=35)	26.32 (N=19)	40.91 (N=22)
(c) с обими конференсье	35.00 (N=20)	48.00 (N=25)	28.57 (N=35)	42.11 (N=19)	40.91 (N=22)
(d) одна конференсье	35.00 (N=20)	36.00 (N=25)	31.43 (N=35)	21.05 (N=19)	45.45 (N=22)
(e) об одной конференсье	30.00 (N=20)	40.00 (N=25)	28.57 (N=35)	21.52 (N=19)	36.36 (N=22)

(15) に関しては、すべての項目で有意差なしという結果となった。それぞれ (a) から (e) までの p 値は 0.698、0.481、0.938、0.547、0.674 である。

(16) хирург との意味的一致と年齢 (%)

質問	10-20 歳	21-30 歳	31-40 歳	41-50 歳	51 歳以上
(f) хорошая хирург	0 (N=20)	8.00 (N=25)	5.71 (N=35)	0 (N=19)	4.55 (N=22)

(16) についても p 値は 0.582 で有意差は見られなかった。

次にインフォーマントの性別についてのデータを示す。2011 年の調査からは врач と述語動詞との一致を取り上げた。2012 年の調査からは врач、судья と два (две)、оба (обе)、один (одна) との意味的一致について、2014 年の調査からは конференсье と два (две)、оба

¹³ конференсье と хирург については врач、судья とは別のアンケート調査からのデータであり、回答総数が異なるため、質問項目の番号を(a)から新たにふってある。

(обе), один (одна)との意味的一致について取り上げるが、データに0が含まれているものは測定不能となるため除外した。以下、(17)で2011年のアンケート結果、(18)で2012年のアンケート結果、(19)で2014年のアンケート結果についてそれぞれデータを示し、比率検定を行う。

(17) 2011年に行ったアンケートにおける性別による意味的一致の選択 (%)

質問	男性	女性	合計
Врач пришла. 「医師が来た」	50.00 (N=12)	40.91 (N=22)	44.12 (N=34)

2011年のデータについては、 p 値は0.7286で有意差は見られなかった。述語動詞との意味的一致については先行研究では有意な差が見られ、女性の方が意味的一致を選びやすいという傾向が見てとれたが、このデータではむしろ男性の方が意味的一致を選んでるように見え、さらに統計的に有意な差は見られない。

(18) 2012年に行ったアンケートにおける性別による意味的一致の選択 (%)

質問	男性	女性	合計
(i) Мы часто вспоминаем об обоих врачах. 「私たちはよく両医師について思い出す」	6.98 (N=43)	11.29 (N=62)	9.52 (N=105)
(ii) Одна врач всегда говорит спокойно с пациентами. 「1人の(ある)医師はいつも患者と落ち着いて話す」	19.05 (N=42)	26.23 (N=61)	23.30 (N=103)
(iv) Из здания суда вышли две судьи. 「裁判所の建物から出てきたのは両裁判官だった」	48.84 (N=43)	65.08 (N=63)	58.49 (N=106)
(v) Обе судьи были молодые и красивые. 「両方の裁判官は若く、美しかった」	65.12 (N=43)	67.74 (N=62)	66.67 (N=105)
(vi) Обоих судей ожидали в кафе их друзья. 「両裁判官をカフェで待っていたのは彼らの友人らだった」	60.47 (N=43)	60.31 (N=63)	60.38 (N=106)
(vii) Одна судья каждое утро пьет чай в кафе недалеко от суда. 「1人の(ある)裁判官は裁判所の近くのカフェで毎朝お茶を飲む」	52.38 (N=42)	58.06 (N=62)	55.77 (N=104)
(viii) Он рассказал об одной судье. 「彼は1人の(ある)裁判官について語った」	51.16 (N=43)	56.45 (N=62)	54.29 (N=105)

2012年に行った調査についても、すべての項目で有意差は見られなかった。それぞれの p 値は 0.8351、0.6972、0.2175、0.8198、0.9897、0.6725、0.6963 である。

次に 2014 年のアンケート調査のデータを示す。

(19) 2014 年に行ったアンケートにおける性別による意味的一致の選択 (%)

質問	男性	女性	合計
(a) Вести программу должны две конференсье. 「番組の司会をしなければならないのは 2 人の司会者だ」	23.33 (N=30)	15.73 (N=89)	17.65 (N=119)
(b) Обе конференсье вышли на сцену. 「両司会者が舞台に出てきた」	26.67 (N=30)	30.34 (N=89)	29.41 (N=119)
(c) Мы познакомились с обеими конференсье 10 лет назад. 「我々は両司会者と 10 年前に知り合った」	46.67 (N=30)	35.23 (N=88)	38.14 (N=118)
(d) Одна конференсье всегда хорошо ведет программы. 「1 人の (ある) 司会者はいつも上手に番組の司会をする」	36.67 (N=30)	35.23 (N=88)	35.59 (N=118)
(e) Он рассказал об одной конференсье. 「彼は 1 人の (ある) 司会者について語った」	40.00 (N=30)	29.55 (N=88)	32.20 (N=118)

2014 年に行った調査についても、すべての項目で有意差は見られなかった。それぞれの p 値は 0.7101、0.8415、0.4659、0.9317、0.2258 である。

以上より、インフォーマントの性別については、今回のデータでは統計的に有意な差は見られないということがわかる。

ここまで 3. では筆者が 2011 年、2012 年、2014 年に実施したアンケート調査のデータを示し、年齢と性別についてそれぞれカイ二乗検定と比率検定を行った。その結果、年齢については одна と врач, судья との意味的一致について有意差が見られたものの、性別についてはすべての項目において統計的に有意な差は見られなかった。

4. まとめと今後の課題

以上、本稿では混合名詞の性に関する意味的一致の選択に関する社会的な要因、特に年齢と性別が与える影響について先行研究と筆者の行ったアンケート調査のデータをまとめ、それぞれ統計的に有意な差が見られるか検定を行い、今後の議論、考察へとつながる資料を提示した。

先行研究のデータはこれまで統計的な処理がなされていなかったが、今回年齢と性別についてのデータで検定を行ったところ、年齢については、年齢と意味的一致を選択する比率は統計的に有意な差が見られるものの、相関関係は小さい、つまりあまり関係が見られなかった。また、性別については、述語動詞に関しては有意な差が見受けられた。そして、筆者が行ったアンケート調査のデータでは、年齢に関してはほとんどの項目で有意な差は見られなかったが、*одна* と *врач, судья* との意味的一致について有意差が見られた。また、先行研究では意味的一致の使用が年齢が若くなるほど増加していることが指摘されていたが、アンケート調査のデータでは、あくまで今回のデータに限ったことではあるが、一部で逆に年齢が上がるほど意味的一致を選びやすいということが見てとれた。これは、先行研究の段階では若い世代であった話者が 2010 年代にはより年齢の高いグループに属していることも関係するのかもしれない。一方で性別については、すべてのデータで有意な差は見られなかった。

今回は資料としてデータを示すことを目的としているため、なぜ先行研究では性別において有意な差が見られたのか、筆者の行ったアンケート調査ではなぜ年齢について *одна* と *врач, судья* との意味的一致について有意差が見られたのかについての詳しい考察は行っておらず、今後の課題としたい。また、今回使用したデータだが、大規模調査のデータはサンプルサイズの大きさから有意差が出やすく、逆に Wood のデータと筆者のデータはデータ数があまり大きくないことから、現実を反映しきれていないという問題点もある。今後はデータの規模なども考慮に入れた研究を行っていく必要があるだろう。

参考文献

АН СССР (1980) *Русская грамматика*. в 2 тт., Москва: Наука.

Китайгородская, М. В. (1976) “Вариантность в выражении рода существительного при обозначении женщин по профессии”. *Социально-лингвистические исследования*. под ред. Л. П. Крысин и Д. Н. Шмелева, Москва: Наука.

Крысин, Л. П. (ed.) (1974) *Русский язык по данным массового обследования*. Москва: Наука.

Мучник, И. П. (1971) *Грамматические категории глагола и имени в современном русском литературном языке*. Москва: Наука.

Панов, М. В. (ed.) (1968) *Морфология и синтаксис современного русского литературного языка (русский язык и советское общество : социолого-лингвистическое исследование : III)*. Москва: Наука.

Розенталь, Д. Э. (1974) *Практическая стилистика русского языка*. издание третье. Москва: Высшая школа.

Comrie, B., G. Stone, M. Polinsky (1996) *The Russian Language in the Twentieth Century*, 2nd ed.

Oxford: New York.

Corbett, G.G. (1979) "The agreement hierarchy", *Journal of Linguistics*, 15, 203-224. Birmingham: University of Birmingham.

_____, (1983) *Hierarchies, Targets and Controllers: Agreement Patterns in Slavic*, London: Croom Helm.

_____, (2006) *Agreement*, Cambridge: Cambridge University Press.

Pesetsky, D. (2013) *Russian Case Morphology and the Syntactic Categories*, Cambridge: The MIT Press.

小林雄一郎 (2014) 「コーパス言語学研究における頻度差の検定と効果量」, 『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソロジー研究部会 2014 年度報告論集』第 6 号, 85-95.

光井明日香 (2015) 「ロシア語における名詞の性の分類をめぐって」『ロシア語研究』no. 25, 83-117.

_____, (2018) 「現代ロシア語の性に関する一致と女性化形態素 Ж をめぐって」『ロシア語研究』no. 28, 77-103.

Notes on the semantic gender agreement and social factors in Russian

Asuka MITSUI

In Russian, there is a group of nouns that have a masculine form, but can be used in reference to women. They are masculine nouns that denote a job title or the social status of a person. When these nouns represent women, they show semantic agreement with the modifiers and predicates. In my previous research, I called these nouns mixed nouns and discussed them descriptively and theoretically. This paper summarizes data from previous studies and questionnaire surveys conducted by the author on the effects of social factors, especially age and gender, and presents data that will lead to future discussions and research. The data from the previous studies were not statistically processed; however, significance tests were conducted on data from previous studies. A significant difference was found between the age group of informants and the proportion of respondents who selected semantic agreement, but at the same time, it was found that the correlation was small. For gender, a significant difference was found for predicate verbs. In contrast, in the data from questionnaire surveys conducted by the author, there was a significant difference in the semantic agreement between одна, врач and судья for age, but there was no statistically significant difference in all items for gender.

Keywords: Russian, semantic agreement, social factors, significance test